はじめに

オーストラリアの歴史は，多様な文化と言語をもっていたアボリジニの住む白人入植以前のブラック・オーストラリアの時代（約４万～６万年前－1788年），英国系白人入植者を中心としたホワイト・オーストラリアの時代（1788年－1960年代），そして，第二次世界大戦後の世界中からの移民を受け入れるマルチカルチュラル・オーストラリアの時代（第二次世界大戦後－現在）の３つに分けられる。本書では第Ⅰ部でアボリジニの歴史と現在があつかわれている。第Ⅱ部ではホワイト・オーストラリア流刑植民地開拓から連邦形成，そしてホワイト・オーストラリア（白豪）からマルチカルチュラル・オーストラリアへの歴史的変化と現在があつかわれる。第Ⅲ部では，ホワイト・オーストラリア時代の日本人移民とマルチカルチュラル・オーストラリア時代の日本人移民を中心にして日豪関係もあつかわれている。以上から，移民国家オーストラリアはその歴史を通してずっと多文化社会であったことがわかるようになっている。

では，オーストラリア多文化社会論の出版がなぜ必要なのか。その理由は，単にオーストラリアについて知りたいという，日本人の好奇心を満たすためなのかというとそうではない。大体オーストラリアに興味をもつ日本人は少ないだろうから，出版社だっていやだろう。では，なぜ出版するのかというと，日本が今後，急速に多文化社会化していくという現状を考えると，多文化社会オーストラリアについて一冊の本を出すことには十分な理由があるのではないかということになる。まず，日本のことから少し書く。

現在の日本は，「少子高齢化」のおかげで「人口減社会」となっていることは，多くの日本人が承知しているはずである。では，毎年どのくらい減っているのかというと，意外と知らない人が多い。日本の人口は2008年ごろをピーク（約１億2800万人）にして現在減少中である。昨年（2018年）は，40万以上が減少している。減少し始めたころは年に15万から20万人ほどだったが，その後30万

以上となり，ついに昨年は40万人を超えたのである。2018（平成30）年末の日本人人口は１億2405万8000人で，前年同月に比べ43万8000人減少（0.35％減），となっている。2060年ごろには人口9000万人を割り込むと予測されているが，生まれてくる日本人は今では100万人を切り，亡くなる日本人は130万を超えているのだから，差し引き30万から40万が減少分となる。

しかし，新聞には人口減少は30万人超と書かれていることが多い。実は日本人の人口減少に対して，外国人人口は年々増えており，その増え幅も拡大しているのである。最近では毎年10万から20万人増となっている。日本人人口は減っているが，外国人人口は増加しているので，人口減の数字は多少小さくみえることになる。なお，2019年４月より新在留資格が追加され外国人労働者受け入れが拡大する。この傾向が続けば当然，外国人人口が増え日本は名実ともに「多文化社会」となり，多文化共生が重要な課題となる。このような変化は，2019年９月から11月に日本で開催された「ラグビー W 杯2019」で活躍した日本代表メンバー31名のうち15名が海外出身（うち８名は日本国籍取得者）であったということにも反映されている。そうなると，多文化共生を実践しているどこかほかの国の理念・政策・経験・社会的影響などをみて見習うべきことや課題についての熟考が必要になる。その検討・みならうべき対象として，多文化主義カナダやオーストラリア，そして米国，ニュージーランドがまず念頭に浮かぶ。このためオーストラリア研究者の中で，多文化社会オーストラリア関連のテーマをもつ研究者が集って，作ったのが本書である。

日本にはオーストラリア研究者の集まりであるオーストラリア学会があり，毎年２日間にわたり全国大会を開き，ゲストスピーカーを海外より（主にオーストラリアからだけど）招聘し講演してもらった後，オーストラリア関連の時々の話題を中心にシンポジウムを開くと同時に，会員による２日目の午前を中心に自由報告セッションを多数設けている。２日目の午後に２回目のシンポジウムを開催することもある。報告やシンポジウムのテーマは多様で，オーストラリアの経済・産業・労働・政治・外交・軍事・法律・社会・文化（文学・映画）・歴史などが網羅されている。しかし，筆者の印象によると，かつて，日豪経済関係が大きく展開することを受け（1970年代），経済・日豪関係研究者が

増え（1980年代），そして学会が立ち上げられた（1989年）のだけれど，皮肉なことにそのころには経済・産業・労働問題があつかわれる報告はむしろ少なくなり，代わりに，オーストラリアの移民・難民・多文化主義・先住民問題などの社会問題の報告が増え始めたのである。

このような現象が起きたのは，まずオーストラリアでの変化に関連する。1970年代に白豪主義が終焉して非差別的移民・難民政策（移民に対するポイント・テスト）が実施されると同時に，多文化主義政策が1980年ごろより本格化したということがあった。そして，ほぼ同じころに日本でも，人口減対策として外国人労働力の導入をめぐり，日本の労働市場の開国と鎖国をめぐる議論が大きくなり始めたころには，イランやパキスタンなど南アジアから観光ビザで入国した人々の一部が不法就労している，あるいは，非合法ドラック密売人として暗躍しているという報道すら生じていて，社会問題になっていた。ちょうど学会が立ち上がったころに，日本政府が出入国管理及び難民認定法を修正して，日系労働者の受け入れと，限られた職に対してではあったが，短期滞在外国人労働者，そして技能実習生を受け入れることにしたのである。

両国のこうした変化は，欧米先進諸国の間でも生じていたことでもあり，本格的な国際移民の時代になったことを意味する。グローバルに展開するこの変化の下で，日本でも多文化共生が課題となり，オーストラリアの多文化主義とその下での移民・難民政策の変化や，多文化主義の下での移民・難民系国民を含むオーストラリア国民の生活・文化がどのように変容したのか関心をもつ若手研究者が増えたのである。なかにはテーマを変更したベテラン研究者さえいた。このような動きは，筆者が関係した日本の国際政治学会・政治学会・社会学会等でも生じていた。急に欧米諸国の移民・難民・少数民族問題の研究報告が増えたのである。筆者も若いころは，さまざまな学界から招聘されオーストラリア多文化主義について報告したものだ。

実は，オーストラリア多文化社会論の出版は，前世紀からの課題であった。しかし，オーストラリア入門の書物さえきちんと揃っていない時代でもあり（当時は関根政美・竹田いさみほか『概説オーストラリア史』有斐閣，1988年が出版されていたのみであった），学会関係者はオーストラリア入門を先に出版すること

になった。それは，竹田いさみ・森健編『オーストラリア入門』である。初版は1998年に，第２版（森健・永野隆行・竹田いさみ編）は2007年に東京大学出版会より刊行されている。そこで，次は多文化社会論ということになるわけだが，なかなかその機会がなかったが，今回は法律文化社の方からのお誘いもあったので，「やっちゃいましょう!!」ということになった。ただ，その前に，早稲田大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究――多文化社会日本への提言』がオセアニア出版社より2009年８月に刊行されており，先を越されたのだけれども，内容に多少重複があるとしても，類書は何冊あってもよいということを考えると，「やるっきゃない!!」ということになる（なお，早稲田大学オーストラリア研究所によるものとして本書と関係するものに『オーストラリアのマイノリティ研究』オセアニア出版社，2005年，『世界の中のオーストラリア――社会と文化のグローバリゼーション』オセアニア出版社，2012年があるので参照）。

さらに気になることについて一言。最近先進諸国では非ヨーロッパ系移民・難民の増加と定住が進み，移民・難民の増加に不安を感じる国民の支持を受けたポピュリズム政党やポピュリスト大統領の台頭が進み，多文化「凶生」がさらに拡大するのではないかとの懸念が生じ政治不安が拡大している。特にムスリム系移民・難民の増加は「イスラム嫌い（嫌悪）」を生み出している。この動きはオーストラリアにも及んでいる。多文化主義のお陰でその勢力・影響力は大きくないが，多文化主義国家でもポピュリズムや白人至上主義が台頭することは大いに気になるところである。

最後に，本書作成にあたり３人の若手・中堅の編者諸君（栗田梨津子，藤田智子，塩原良和）や執筆者の皆様の献身的な仕事振りに加え，法律文化社の舟木和久氏の適切で寛容なる指摘や助言があってはじめて完成したものである。本書により日本でも十分な対応がとれるようになるとよいと思う。

2019年９月

執筆者を代表して　関根 政美